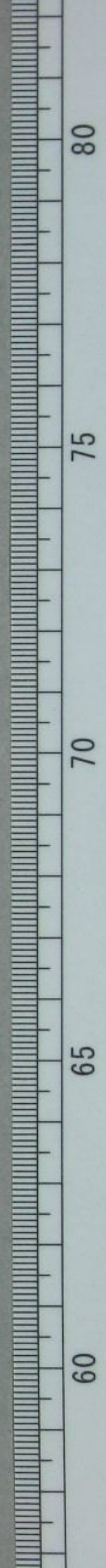


一幅半

礼正
1119 大

~ 5
1440
1



新
1440
卷



一
幅
木

序

今ハしりしき世の翁一幅木此
神と云ふか木一柱と云ふつて
路草一草と云ふはりや、
つゆのむと身つゆのふその
まはらむか跡るらりし
あつてえ福屋辰めし

11941



神流舎

こけ巻しのまゝに先子まゝに
ほのくに紙飾の

南無とら

あゝー 紙子此まゝ
毛子此まゝ

團扇紙子

奇仙

芭蕉

紙子の紙子と毛折の雨の毛

すゝまの紙子の紙子の紙子の紙子

紙子の紙子の紙子の紙子の紙子

紙子の紙子の紙子の紙子の紙子

紙子の紙子の紙子の紙子の紙子

紙子の紙子の紙子の紙子の紙子

一

このまゝにたゞの

白くあつてあつた

のせゝ

編書の先でせしむる筆投て

蹄中れふを片袖とせく 芭蕉

ふよかるの籠と借みやこ人

命をとりふ乃連言と懐子 全

汐ハテて破子ぬ書須戸の浦

日母子かまふる家とあひて 全

も念ひのこる極のよれ中

不ぞしと飛ぬくこれ月とら 全

目之能のくしと其まき詩子信

ハツまれる子供影信けり 全

一折

梅のうつくしき
これにこそ時よ

源氏

ほろろと二つとあり月夜に

妻も早苗とぬくすきやくと存

松年よやうに桐屋の御と 芳本

そきて金糸のさうていさな物と由

信申子ころれけいさな量杯益 存

十むりころと茶と 吟きり 巻

朝霧の馬の大陣の道に 中

ふりてつとまふかりる月 本

小便のけいころとせり不月心 巻

唯いとくまの庫裏の筆 存

わきほきてぬくとけり相らむ 本

大敵捕のさけりてと声 中

弓と飯のふてけり男と色 存

とくいそへこける脇さ 巻

いふ日子出合ふと息とまぬ影中
移ぬく未此未此ちりし心奉
こらすれ朔夜とまぬ心奉
版のきりぬ三つ此心奉

燭寸

支房

筆此やこころぬけし心奉
其の荷の心やうぬぬぬぬぬ
十粒音の世間の嘆気はし心奉
好のくぬれハタ時心奉
を度此月とこ松乃わぬ心奉
子し方ぬ縁は雁心奉

耳傾き久しん波々門の權
 地をのきさびらりといふ
 夜ハ周をハめく此永森も
 といふ望まふ不便なき
 是はとて地の目此がた
 之六々何く積り双六
 藪寺の茶をのり有る清く
 といふ一巻の法く梓備

肌をさうへに浴衣を着る
 月の如き世に夜は高
 清らかなれぬとむと速き
 入毎此くみぬる此集り
 年人といふを子と信り
 といふ此の海折り
 山崎といふは地物を出し
 江崎といふは伯母と相

夕影とまてい風へ山長流の
 空路のなまのり雲をちり
 なる雲はせう合てつそふ小枝
 きれとれりあやほと霞顔
 大日此のころハ柳の心きりけ
 大夏は梅れと梅の心足舞
 年寄れきりあつた子離月
 わつさく之きりあつた子離月

こは神よの今そまてい五白
 西風の極孫よこころ松声
 旅とちいさき見れは年寄り
 うち世の事いりあて入お
 草花此の道はりあつたの
 禁れむ見のふら早あつた

六吟

蒲道

このやうな時、はろりや鶴が舞

宵の戸のしるしをさるる秋風 浮菟

南しやとお母ふと山子月出て 立桐

触りきり人のねとておろ 雅草

さやと波刀とていれと赤いさ 吟堂

こりけぞたたら草花細川 中洛

せん一草の中へ陽葉と実のて 老

夕影の雲はきくぬかちなり 通

聲去とへりくゆへ取返し 年

山椒の月の枯て櫻新木 相

振神はちりと赤きより海に地 洛

か〜〜と時よほく形ふてを 老

月代よかくれを月と持てまゝ 通

空よの飛もたふと〜〜けぬ 老

所々い留れ秋とくやこて
あのちんだても支持ふり
眞實にお多かたお子や孫お子
ちんをい暑い海よりちん
はあふ湯谷に陰りも盛
とくすんちんや 係る言き

春の歌

又の果おじ月と夜へ千代乃江戸 季吟
新編を解き葉命とよ丑の年 芭蕉
春をよみ三井女院のかうやん 其用
小女う敵取あふあきうよを其有い遊
後者れすこれ春や松かさう 其用

雨声此急ハ原奥かゝり
之類の草碗をとりけし
けりし 甚と云けり
況能くして解と云ふ事
む一輪

梅おてかゝれ流の難業か 木固
まのやちや也也此岸らん 雲
まらやちや月よきとて 梅よ鳥 乙存
美 年よま田系美をう 依う取 正丸
抱てあう子の歌打て 仰きよる 之言

八幡元日酒

秋湯

我れ々應えしとてさう若の去 淫慾
坂よりつて平地やむれ去 美本
まにようし ちあ良よ 親子やむの去 淫廉
節を著て 板之神や梅のむし 巾
草は草や くれし 作之志は 李中
草は草や 楓のちう 梅のむ 美新
さうれ 声とちあう ぬ 朝の 南星

あけほのや若くはくらの辰巳年 不徳
おき板の浮はさめくよ明てくく 羽分
おのときく 童歌のよ 詠りけし 子
ほろくくと果とひくく 難産の 玉ト
入主信子明乃かきくや節小神 湖夕
あけ水やしりー 澄七又十於川 尚如
よきくそい取瀬へこいあわ草 涼巻
火雄くく 玉まーく 出家暮く於 白歌

そりや宮川りたく何 百星 五桐
あけあきた山かすそくさ音なこ存
桐子よりくまともあり白あけ 羽色
さくハ神より 啼ーく 梅のむ 三本
うくひまをる 扇目よ於ま 朝産 白歌
庵えんせと音たきくや行の中 芳古
うくひまのき川音ハ行よ池れ 豆涼
あよもりに 梨ハくくく 梅のむ 芳古

180

うぐいさやこられ救うくがれ物行内
うぐいさや小指伝うこられ枝万形
音のう形かけきうの早く乳茶甫
うぐいさや茶室へよ初てく茶葉
花きよなる白いやいれを茶甫
きうのれこく子梅乃茶室の万形
まいさうくまう同よかて梅のむ満通
相う彩さめて

いろくれ形持てまろ梅のむ神の
好く梅折ふと何うの益了益
一楓と柳の枝とかゆくまう万甫

茶室の
とまうあて

木男十ころ柳や園おま^{エト}ト世
ゆふちうと風のえま入柳れ伝奉
長谷越^{エト}ま
まうく山河やころく山椒味^{エト}伝奉人

化るるに於るや幸乃る言也
 八葉ノ
 角門とぬけて榊合む見代
 乙存
 服部とよ海北む見やまけ
 全
 世もや実りと思ひ深少神
 涼巻

停好あり
 まくひれ

誰彼女といふもむしむし停好に
 耕月
 まあれは持合ありむはる
 言初
 門てまの金華むむい
 や榊得加草

むはるる只於る一てあり有涼巻
 ほうゆハ葉子れやうなりき此むハ葉
 あらこれハあらハこらるる榊うか
 神の
 苦る哀切子何このむあま山はるる
 紅葉
 う夜れ明てむらけけけらるる氣櫻
 新水
 多き時分と船まう山はるる
 燐芝
 世話やいてまあ座よりゆか榊うれ
 藤羊
 うらたろ榊乃中やかろる
 暮
 白紙



山桜う朝ハ百重も花ハ
織物のやうなほりやむも
けはハ油たきへやさくも
ややかうと物子あふ見
う川くう桜まらぬ
あや

大志多江乃桜

仲藩きも見いろや江乃過
櫓の飛舞のころや江の櫻
本園

初階北むの海を

舟下まは橋下
あつて

わふれうろ不きを
坪越子見り不化のわ
後じく人の何冷山
欲徳いこく櫻
田と時もぬ
足摺子震

廣神て出るやと取めやつゝ雛こ存
大井よハ子守の君と雛の姿涼葱
化粧より形おと、桃の葉屋より佳奉
留りてあつぬ屋敷や桃のむこ存
貴ふてよもきふとくれぬ柱の那是水
苗代の子守いゝれ子守いゝれ如約
田久とや蛙も心て骨と折光記
梅とくろ人の志川まお蛙の涼葱

心のおてあぶといくほや 美香 芽か
おほいしお声もきとて蛙の白鯉
山川よりいれてからよ蛙の那好房
柳まじい男てまねいゝ田螺賣 さう約 諸友
片らくはれまらん馬よりは柳哉こ存
ほらくはれにや筋入とく柳のれ如約
ほらくはれや人はいも目まかけは杜偏
柔ときらして跡と見よあつ燕子 房古

振舞下とふれて鷹の降るる 雲芳
さく雀見て疾きか門乃 宮ヶ成 柳玉
雀籠子や障子此門く 冬に片 涼腫
暇立てい川十 舟やう 船を此色 呂祐
愛りふかかしくこつたいと 摘茶本下 八景
赤らふすわまら覚て 摘茶うを 沖
一而子月めくねくれぬすくれは 神の
茶摘ううそ持通り ちちりきうの 信昌

いろくのそと出りうりそつし 柳 柳音
猪の患のげうつ免てう 屋根此言 信昌
羽つういのわづれう 遊ふ小蝶うね 神の
月さうや杜の筋ううい くれり 冬涼
鳥よまの何とたりのせ いれわり 季中
まま念仏猿うそあ 返ておまゝあり 丹野
ふ吹や身とれをゆき 剛の上 自雪
むすりうー通此小松や 恙みきり 涼葱

子言やきくつと友れわはらし
と係の心風をかりれておぬまう
ほつしつふくふのきやまの心
片島

夏女部

細れう常清の宮や衣かくて存
浦光さうに早天うこれ給ふ
之度さの男にまきわらせが

負

於くと候者此給はわらふも
たはせよしんらんと給は
南里

すんかりととせこれさや衣之
梅とあつた片鼻あつたを
ういれさう風吹と色縁うれ
さうーや乳のやうにさう
門出の声と上きり晒す
是りとのうらるるやあつた
時鳥うらるるあつたのうら
ほとさう初音の風と音響
教 桐

ふたつとさうあつたあつた
ほあつたあつたあつた
部と小坂と川や朝茶の子
水鏡あつたあつたあつた
朝起のあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた
一室はあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた

1001

五

茶子此也一七セ 振るまけり 芥子此也 一鶴
差と見しやうのまぬらう 芥子此 ハ兼
芥子此也 挽てまわらうや 芥子此 ハ兼
う川とらと 振るまけり 芥子此 如約
と川とらと 振るまけり 芥子此 如約
茶子此也 振るまけり 芥子此 子此
けらくと 大川とらと 芥子此 山下
裏店とらと 細き牧とらと 子山 とらと

菊や一休うらて 思案かほ 去甫
竹の子や 茶子此也 色ハおをり 扇雲
美竹の雨とらと 芥子此也 芥子此
うけとらと 鬼灯がらと 初芥子 原巻
き波此かいら ばけり 夜通下 芦心
振あつる 神のほらとらと 芥子此 乙存
茶とらと 大ねとらと われとらと 涼包
何とらと 川とらと 我 涼巻

物いへん尾河もくたわの雲うね 杜英
鳥かゝるちんくしきよ神(す)て 羽を
やうく物、立りて恋れつ田植下 乙存
四六白此旅おそく一泣と青田下 小山
帆うけ舟見うー竹やらのを田植 木口
ウーしぬ子たう先出ーらる扇合が 若年

梅よりあそ

あつ○も場井ままいしむむ梅を 徹士

扇より信のあつ方どかき(ら) 丹野
惜半世川かくとほふてこけぬら 吟堂

信風とらふと里北名子
のころと地巻ころ

夏草や原のふもふ布くす多の浦 涼鬼
夏草や原のふもふ布くす多の浦 万葉
徴羽のいさよあゝぬらあめ下 氏台
くま川と朝と見きくは糸うを 寄芳
糸長宿うわうらうけよりまうらふ 涼鬼

わづけちやあつの中一はけのめさよ 涼冠

いづれの時時よあつきい

大さやまを一紙と字のり

あつきのひ

村の子や大おの親のなま 耕月

よと度復よやうれきやに新れむ 涼冠

切まれまふなまふきり 片水哉 齋翁

けうれたあつ大おき房やまうの冬 乙存

夕之河まうのハキまうて縁めかり 榊水

白ゆや水け輪の中あつ 一鶴

夕之と招く吹ぬく 尻うね 十丈

夕之やじいの山て待あう家 好風

園友新 志のり

と輝きけ色も原 一や松の竹口遊

朝くそおゆ風とく新 涼冠 夏芳

村まけわくそよ 新れやま涼冠 一八

うやういふ今日内まぬを涼冠 万初

名園とよみきて涼一丸 裸信昌
涼一とよみきて涼一丸 田代信昌 涼一

秋の歌

山文よ願れてもあや相撲お場 涼一
とよみ人ともあられてもま原お撲の場 一箱
判立おあしともみ合ふともむ成ハ葉
大根の二葉あまきりや秋の月 涼一
桐お舞のあゆみくよこぬよりう 三九
夕暮およこれて桐の一片うね 去南

鳥こゝろよいんからんれてやまの柳 遠き

きくれきよきけりし角部りて
かきうていしれい 上巻

きねりや赤ぶし神う十二也 乙存

里今や蟻けに心う天へゆく 旗枝

けい合れや巨やうにいきりりり 涼葱

を付く犯わくきりたやりぬ乙巾

乙巾ちう部いれ酒風のきりすて 信局

編ようりてえされまきぬ編子一鶴一

運ぶるまあうや清地れまりわて存

小武部と先まさてや玉あり白書

挑灯け武者と踊やまの門に遊

編つまめり所出しぬくやまるま 燈後

いるまま森すくく知り板りが宗し

早稲荷や流の田よハ二書草 露川

さしく種や、町邊はく三ヶ一夜夕

七中れ種ときくりり子川其角

稀はて鳥さほらやあけの柳 長南
鶉乃やちぬとむの夜草 柳む
鶉乃や列と撮つてん草屋 志冬
長きけをぬかりや鶉乃む 万季
鬼灯の啼とれたる様は口宗と
寺に川と道とをた薄く柳 もね 吟子
こころも今とくぬとれたる神の
幾士の言痛くふりや昔れむ 遠野

岩のこの音のちとれぬ 草屋 杜英

月見塚
鳥子あり

愛しくは誰か見せし不波の 芦花

山乃月浦の月里花月
松うらむのうら

りふ月やあはれむ牛ななやうはふ 入彦

回文

さき此同さうとんせしうん月見が 全

久月おわりしきほりてけ 涼老

雨好月

高の人、秋さ冷し月おぼやう 今
海山は枝のぬれして月らんや 八景
けじまらぬをぬれつとや三日好月 南里
一とては佳節、しを好れ月見だ 兼羊
夏よおきしや、こは鷹のをわうと 更那
秋とすといきつとや松の熊の声 契枝

冬と布袋おやうよとてうり鳥 乙虫
車座よぬれぬりきく 鶉の籠 沛帆
よにほるまゝの志ありやとて 芝伯
おもしろくおの、座あやふおむ 九捕
夜は来きしやう 庭の声作り 淳意
啼と泣の形いふはうじおむ 万助
山風や天定お上河 藤乃声 炎雷
庭の声会仙して答へきく 友夕

麻の後やとそけり申し山崎の船 呂儀
麻の声跡ハ志くして 唯ぞ
啼とけりときけい答れぬ杜父魚下 一口

義仲寺にまきく露の
跡と玉侍りくかの

涙さうこけこふ伝あまの秋の凡
と聞へしとれりあはれ
られこたやば一りそと
おのふをかひぬさ
いよとくさ
と御侍り

了少前此塚さうこけと腕の色こ

追悼

是れ北さち記うかせや露のこころと 漆巻
伊子たり記わらうこころと秋の風 頼山陽
新女若美いさけくありきり一二帖 二存
後のせしあとりさあり 客相系 一八
け本雲れとのきと落て申かつ 桐羽
猪のこんぬるわらうけぬるふか 二中

思此目子洞々あつても秋のくれ 正九
後芽まゝこせうくく人や秋の言 乙亥

みの記

松ノ花 自然なつた

嘗浦の若は呼切すまゝに花 松年
着物乃身にまゝに片くや初所向 杜楠
時向浮座のまゝにぬ古後ま 涼亮
まを物此の店と以んまにまゝにれま 乙亥
内く母やかく印る所向の片わたり 乙亥

是地もあし鳥て特ある山行の空牙
啼る跡もさかち記さくれりや 八葉
志しれまもささの形ちり 縁産り 云口
特あるやさ海くさし此入るれ 好凡
十月よなるやふよ此かつりり 乙存
十月のりやう作りやと海け 跡凡
まなぶ志を編綴ぬし片さくれば 相羽
休まらぬまゆまやまは子れ初時局 跡紅

不指や鳥さかろく 秋乃去 如豹
木かろくや志のひうへく 好凡 相羽
赤衣ちりつ表をさぬ川にさくれば 本園
入桐子猿く紅葉もさぬまらり 八葉
下知葉蓋片け鳥此あしり 相羽
たがへのことさくく門のうらまは 乙存
まを飛よ一へん掃くまをまらり 蒲道
つらくと不破の山根ふくは葉 雨夜

起きして版ハキテとて火燧ウカ 籾羊
火燧ウカマツリ 籾ウカ後ウカ 籾中
と心のみて中燧トセウすれぬバ 乙存
京の圖ニキキトて心と中燧ト 玉南
美役よのみてりて心と中燧ト 時慈
栴ろち子并てあつれ中燧ト 籾孝
四方ウカ手て垣トウカ中燧ト 友松
蓮子ウカ籾のさだめと心と 陸奉

夕部まて 籾光と心と 籾ウカ 籾
美ト心と 籾ウカ 籾ウカ 籾ウカ
あつれのみと心とのさだめと心と 耕月
籾君れ 籾風トて 籾と心と 籾 竹堂
あつれ 籾 籾 籾 籾 籾 籾 籾
籾のさだめと心とのさだめと心と 一青
籾ト心と 籾ト心と 籾ト心と 籾ト心と
籾ト心と 籾ト心と 籾ト心と 籾ト心と
籾ト心と 籾ト心と 籾ト心と 籾ト心と

隣りてつらふさきりみく籠 桐羽
楸の木の蔭や祖父のあかま 乙春
茶坊のや大車此意を定ふる 全
有明の朝にや枇杷の花 宗乙
仙人のたごりこがしや冬ふま 乙春
きよ見く草の外の付 松野の 薄歩
初雪やあをきくくく少梅人 素破
ま川をよやきぬく 清れを度申 万劫

初雪やわたりぬもよぬ朝と実 三屋
まの雪子起つころま川をよま 薄巻
初雪や空一色梅と見え 露布
初雪此降るくれき新日原 板不
ま川をよや見えくぬ物と日暮る 長南
初雪にきぬ力けり 膝う 修彦
唯舟れをぬつやあつや 雪丸 清彦
ひくまのぬあま 何うう 高石言 乙春

水ゆくとそへぬきくし素足くれ 藤通
葉よきとちと柳のきくしと 古世
あの中へ水と流しらしは笠原 元牙
指すや霞れくもながく 本園

旧なよ 封し

水ぬやうの北中よきはと事 芦か
水ぬや京路く後く百く物 左流
水ぬの小首かきやと開きく 由里

三位の神 主よ あり

清浄な葉けいよはと水ぬを 浄起
入船の波よ骨折く子鳥くれ 如約
すき通る声や水田のなちとく 乙倉
まきくれく子鳥まきく 次馴松 万初
松の勢北吹くまきく 子鳥ド 八葉
一せに三人れく 紙子くれ 併
老僧や顔のかく人ちけ 双巾 契松

白川の園いびり一古芳歌
此入通社凡と吹といふ
一歌とて 井田入た
野更に新しとと者して
通もつらととくや路毎も
ころせとてしりて

去る川の園て者かよととて社 耕月
飯つりや今も何備く浦此彼 浮冠
投られと飯子いふとや飯り而 竹角
今此世のち柄との外り 飯つとさ 吾世

菽那子言少者さし此海風下 素坂
とらまはる毒しやくく 船行 八葉
圓ハ鼻此下よわうと能知中れ 玄薩
飯わりの波はまきこほつと 宗雪
空声や月と夜まきうと一かき 如規
寒を毛のさ傷たのそくかれば 聖後
空を空やと傳あうり此中月夜 七夜
此空の志ハおしりきうわ此枝 浮冠

片々いほめらううにぬやめくの梅 穂の
つらき師をよさうぬらほらう 宗也
ふれは梅とさうぬれ師をい 素也
あの人を先よと見えさう師をい 涼也
常一にうまう序をぬれは師をい 一鶴
後入まよぬ師をいの日和 阿村
月世の樂よ言れさう師をい 言能
とやまてぬもさうや節をい 関之 ヒメナナ

妹の肩よりぬぬの心さあうり 日 子馬
けうとくゆせくくくく師をい う馬
大さうに庵うく起て師をい 素也
切し養の吹れてわうく師をい 涼也
糸糸や 靴のこらと子ハきうは 挑也
幸は常勝と経合うけうおっ 言助
引年けうーろ漆や 老乃と 広止
解つさやかたれ男も 玉とら 茶 素流

名師の筆蹟の文に記す家系は
こけり此れいふにわろくやまは市
かゝ鞋乃身ハ京へ出て師是に
千石の門ておとれやまは市
大直まはや晴まはは大直うと
節分や亦まのの程と符
力ていけぬ師まやすま取
はれて家ハまは川師まは
金牙

味師垣の玉手くくや師まは
君本

雑のま

愚偏の奇く境山歸る
のまかや川くくくまはの
ゆりしれま今の世う
まてわや片うてま意
まの原ま子まおまま
まのまままままま
雑のままかまま

言傳のけもけまや愚偏師
も存

